



学びと成長レポート

Vol.6

『学びと成長』に対する満足度と意欲の推移から見えるもの

1. はじめに

立命館大学では、学生の皆さんが、入学から卒業までの本学での学びを振り返る機会として「学びと成長調査」を実施しています。学生の皆さんには、入学から卒業までの間に計5回(①新入生調査：入学直後、②在学生調査(2回生～4回生)：4月～5月、③卒業予定者調査：12月～3月)にわたって同調査に回答いただいておりますが、その回答データから得られる情報量は非常に多く、有益であるため、教育の質改善のために本学の各所で活用されています。

さて、この「学びと成長レポート」は、同調査における回答データをマクロな視点で分析し、本学学生の皆さんの学びの状況を可視化しフィードバックすることを目的としています。今回は、同調査におけるQ6の「立命館大学における正課での学びと成長」「立命館大学における課外での学びと成長」における満足度と、Q7の「立命館大学における授業等の正課での学び」「立命館大学における課外での学び」における意欲に焦点を当て、コロナ禍におけるオンライン授業の実施を挟んで、各学年の満足度、意欲がどのように年度で変化していくのかを見ていきたいと思います。

2. 学びと成長に対する満足度

分析には、2016年度春学期から2023年度春学期初めに実施した在学生対象の「学びと成長調査(在学生調査)」と、2016年度から2022年度の秋学期後半に実施した卒業予定者対象の「学びと成長調査(卒業予定者調査)」で得られたアンケート結果のうち、Q6「立命館大学における正課での学びと成長」「立命館大学における課外での学びと成長」に関する「満足度」の回答を用いました。

「正課での満足度」を(1)に、「課外での満足度」を(2)に示しています。

なお、(1) (2)ともその比率は「満足していない」「あまり満足していない」「やや満足している」「満足し

ている」の4選択肢から「やや満足している」「満足している」と回答した学生の比率(肯定的回答比率)です。

(1) 正課での学びと成長に対する満足度

調査実施年度	新入生	2回生	3回生	4回生	卒業予定者
2016	—	67.3%	73.4%	77.5%	87.6%
2017	—	71.7%	75.1%	82.2%	88.4%
2018	—	71.9%	76.0%	84.5%	89.2%
2019	—	71.7%	75.3%	84.2%	86.5%
2020	—	74.8%	75.7%	81.7%	88.2%
2021	—	63.4%	77.2%	83.7%	87.5%
2022	—	79.9%	76.5%	86.2%	90.1%
2023	—	81.7%	82.5%	85.7%	—
年平均	—	72.8%	76.5%	83.2%	88.2%

この表から読み取れることは大きく2点あります。一つ目は、「正課での学びと成長に対する満足度」は、学年進行に従って高まること(年平均の行：2回生72.8%→3回生76.5%→4回生83.2%→卒業時88.2%)です。二つ目は、コロナ禍による休校を余儀なくされた2020年度入学者の2回生(主に1回生時の学びと成長に対する評価)の満足度(63.4%)が他年度の2回生(平均72.8%)と比べてかなり低かったのですが、その学年も、ほぼ対面授業に復帰した2022年度の3回生時(76.5%)には他年度の3回生の平均(76.5%)とまったく差がないほどに回復し、完全対面授業が実施された2023年度の4回生時(85.7%)には、他年度の4回生の平均(83.2%)を上回るほどになったことです(水色の塗りつぶし部分)。少なくとも「正課の学びと成長に対する満足度」については、1年間以上の休校が学生に与えた影響は4回生になる時点でほぼ解消されたように見受けられます。

(2) 課外での学びと成長に対する満足度

調査実施年度	新入生	2回生	3回生	4回生	卒業予定者
2016	—	64.7%	73.2%	83.1%	83.4%
2017	—	67.9%	71.3%	77.8%	83.4%
2018	—	68.5%	70.7%	80.5%	83.8%
2019	—	68.7%	71.8%	78.9%	78.0%
2020	—	66.1%	69.7%	76.5%	74.4%
2021	—	52.0%	68.2%	78.9%	76.6%
2022	—	68.7%	65.5%	79.6%	76.0%
2023	—	74.3%	73.9%	76.5%	—
年平均	—	66.4%	70.5%	79.0%	79.4%

同様に、「課外での学びと成長に対する満足度」も同じ傾向が見られます。満足度は、正課に比べて4%～8%程度低めではありますが、学年進行に従って高まる(年平均の行：2回生66.4%→3回生70.5%→4回生79.0%→卒業時79.4%)ことと、コロナ禍による休校を余儀なくされた2020年度入学者の2回生の満足度(52.0%)は他年度の2回生(平均66.4%)と比べてかなり低下したものの、その後、徐々に回復している(4回生時76.5%：79.0%)ことです(水色の網掛け部分)。

ただし、「課外での学びと成長に対する満足度」は最後まで他年度の4回生の平均を追い越すことなく、2020年度の4回生(最後の年にコロナによる休校を経験した学年)と同じ過去最低の76.5%にとどまっています。これは「課外の学びと成長に対する満足度」については、入学した当初の1

年間にどれくらいの友人やクラブ・サークル等の人間関係が構築できるかが、その後の大学生活に影響を与えたからではないかと推察されます。

3. 学びに対する意欲

分析には、2と同様の調査から2～5回生のQ7「立命館大学における授業等の正課での学び」「立命館大学における課外での学び」に関する「意欲」の回答を用いました。「正課での意欲」を(1)に、「課外での意欲」を(2)に示しています。

なお、(1) (2)とも示された比率は「意欲がない(なかった：卒業予定生調査)」「あまり意欲がない(なかった：卒業予定生調査)」「やや意欲がある(あった：卒業予定生調査)」「意欲がある(あった：卒業生予定調査)」の4選択肢から「やや満足している」「満足している」と回答した学生の比率(肯定的回答比率)です。

(1) 正課での学びに対する意欲

調査実施年度	新入生	2回生	3回生	4回生	卒業予定者
2016	95.7%	79.0%	82.3%	82.3%	85.2%
2017	96.5%	84.8%	84.6%	87.3%	85.6%
2018	96.9%	84.7%	83.9%	87.7%	89.2%
2019	96.3%	82.3%	81.6%	87.2%	86.5%
2020	97.6%	83.7%	84.5%	85.0%	88.2%
2021	97.0%	85.2%	86.4%	88.4%	87.5%
2022	97.1%	88.1%	86.7%	89.0%	90.1%
2023	96.4%	89.4%	87.2%	89.7%	—
年平均	96.7%	84.7%	84.7%	87.1%	87.5%

「正課での学びに対する意欲」に関しては、満足度と少し異なる特徴があるようです。まず、入学したての1回生の意欲がどの年度も最も高く96%、97%にも達しています。その後は概ね80%台の後半を維持するようです。ただし、厳密に見ると2、3回生よりも4回生、卒業予定者の方が高い傾向があるようです。

また、懸念する2020年度入学生ですが、意欲に関する限りは他の年度と差はありませんでした。これは意外ですが、オンライン授業であっても正課での学びに関しては例年と変わらぬ意欲を持って授業に臨んでいてくれたことを示していると考えます。

(2) 課外での学びに対する意欲

調査実施年度	新入生	2回生	3回生	4回生	卒業予定者
2016	92.1%	77.3%	78.5%	77.6%	74.6%
2017	92.6%	76.9%	77.5%	81.4%	74.3%
2018	92.7%	76.7%	77.7%	81.3%	76.0%
2019	92.3%	75.3%	76.5%	80.8%	68.8%
2020	93.6%	75.6%	76.3%	76.9%	69.8%
2021	92.8%	77.1%	77.1%	81.1%	70.3%
2022	92.8%	78.3%	76.6%	80.8%	69.0%
2023	92.8%	80.4%	78.2%	81.5%	—
年平均	92.7%	77.2%	77.3%	80.2%	71.8%

「課外での学びに対する意欲」に関しては2回生以上で「正課での意欲」より10%前後、肯定的評価が少ない傾向があるようです。現実での友人関係、クラブ・サークルにおける人間関係に影響されている可能性があります、それでもどの学年も70%以上の高い意欲を維持しています。

気になる2020年度入学生も、他年度の各回生と比して顕著な差は見られませんでした。実際は上記2-(2)で見た、2021年度の2回生時の「課外での学びと成長に対する満足度」は大きく下がりましたが、入学当初には高い意欲を持っていたことがうかがえます。

4. 他の調査研究から懸念されること

2016年度からの「学びと成長調査」のQ6「立命館大学における正課での学びと成長」「立命館大学における課外での学びと成長」に関する「満足度」の回答からは、当初、正課、課外とも2020年度入学生の著しい落ち込みが見て取れました。ただし、その後の経過からは学年が進行するにつれ、他年度の同一学年の平均との差が小さくなり、4回生では正課について他年度を上回り、課外については平均と2.5%の僅差まで回復したように見えました。また、意欲に関しては当初より他年度との差がほとんど観測されず、例年と同じ傾向にあるように見受けられました。

この結果は教職員に一定の安堵を与えるものです。しかし、本当に彼らは正課や課外での学びを回復し、例年と変わらない成長を獲得したのでしょうか。そして今後の新入生は、もうコロナ禍の特殊な状況による悪影響を脱して、大学の門をくぐって来てくれるのでしょうか。

結論はまだ出ませんが、これらのことを考える上でいくつかの気になる調査研究があります。

(1) 児童生徒の自殺、不登校の増加

厚生労働省と警察庁によると(読売新聞オンライン、2023年3月)^{*1}、2022年度の自殺者数の確定値は小中高校生の合計で514人(高校生354人(前年比40人増)、中学生143人(同5人減)、小学生17人(同6人増))となり、1980年の統計開始以降で最多となったと報告しています。2016年度から2021年度までの推移を見ると、2019年度が合計399人だったのに対し、コロナ禍により休校が相次いだ2020年度には499人と激増しました。文科省は、長期化するコロナ禍で学校(成績、進路)や家庭(親子関係、しつけ)、病気の悩みが深刻化したことが一因とみています(文部科学省、2021年)^{*2}。

また、同様に文科省の調査によると、全国の小中学校で2022年度に学校を30日以上欠席した不登校の児童生徒は前年度から5万4108人(22.1%)増の29万9048人となり、過去最高を記録しました。不登校の児童生徒数は、2019年度18万1272人であったのに対し、コロナ初年度の2020年度は19万6127人、21年度24万4940人、22年度は前述の29万9048人と急増しています(文部科学省、2022年)^{*3}。

コロナ禍で学校が休校となったり、対面授業が中止となったりしてさまざまなメンタルでの不調を抱えた児童生徒は、今後、大学に入学する際にこれまでと変わらぬ学力と意欲を持っていてくれるのでしょうか。

(2) 小中高校生の遠隔授業経験率

少し古いデータになりますが、2020年2月28日に文部科学省が全国の小・中・高等学校等への一斉臨時休業を要請した際、同時双方向型オンライン指導を行った学校種は、小学校で8%、中学校で10%、高等学校で47%でした(総務省、2020年)^{*4}。それ以外にも教育委員会等が作成した学習動画を用いたり、デジタル教材を用いたりしたところが多数あり、初等中等教育でも比較的早い時期から遠隔授業が行われていました。

また、信頼性に欠ける部分はありますが、スタディプラスが2022年8月にスタディプラス・ユーザー3,200名に行ったアンケートでは、中学生の38.3%(国公立)、62.7%(私立)、高校生の45.4%(国公立)、

69.1% (私立)の生徒が「オンライン授業がある、あるいは過去にあった」と答えています(スタディプラス、2022年) *5。

大学のみならず、小学校、中学校、高等学校でもこの間、遠隔授業、オンライン授業が行われ、対面授業が縮小されたり、体育祭、文化祭、修学旅行などが中止されたり、クラブ活動が制限されたりする事例が多数報告されています。本学において2020年度入学生が卒業する2023年度末をやり過ごせたら、コロナ禍の悪影響は終わりを迎えるという期待は、どうも根柢が根底から崩れているような気がしてなりません。

(3) オンライン授業に対する適性

これまで初等中等教育におけるコロナ禍の影響の可能性がありそうな問題をいくつか見てきましたが、オンライン授業あるいは遠隔授業そのものが教育において問題をはらんでいるという訳ではありません。コロナ禍を契機にして、学校が休校になったり、対面授業が縮減されたりして、人と人との直接的なコミュニケーションの機会が減ったり、顔を見て感情を伝えることが少なくなったりしたことが、一部の子どもたちの認知的、情緒的な発達に悪影響を及ぼしている可能性が指摘されるのです。同様のことは青年期後期に当たる大部分の大学生にとっても一定の悪影響が想定でき、それは「本来あるはずだったキャンパスライフの喪失という体験」であると、日本学生相談学会理事長の高橋恭子は述べています(高橋恭子、2020年12月) *6。「学びと成長調査」の満足度や意欲の平均点からは見えてこない心の傷が、今年度卒業する学生たちから払拭されていることを祈ると同時に、これから入ってくる学生にも影響していないことを期待するばかりです。

また、オンライン授業や遠隔授業そのものに関しても、学生の適性や好き嫌いにはさまざまなものがあることが分かっています。本学ではオンライン授業に対する学生の満足度や学力等(GPAや理解度)について「学びと成長レポート」(第2特別号：2021年、第3特別号：2022年、第4特別号：2023年)やITLニュース(ITLニュースNo.53：2021年)で報告してきましたが、そこからは、決して学生はオンライン授業を否定し、完全に対面授業に戻るべきだと考えてはいなかったことが明らかになっています。もっと言うならば、授業の「学習充実感」をもたらすものは「授業の質」だけであり、もはやオンライン授業、対面授業に関係なく、インタラクティブティやフィードバックの有無が重要なのだということが分かりました(ITLニュースNo.53：2021年)。

さらにオンライン授業に対しては、①学習意欲に乏しく、計画的に学習することが苦手な学生、②活発なリアルな学生生活活動に適している学生、③何事にも消極的で、情報デバイスの利用に不慣れな学生は不適應を引き起こすことが分かりました。逆に①学習意欲が高く、計画的に学習できる学生、②受動的で、対人関係がどちらかという苦手な学生、③高度な情報スキルを持つ学生はオンライン授業に適性があり、コロナ禍でも有意義かつ充実した学習を行い、生活を送っていた可能性が高いと言えます(沖他、2023年) *7。

これらの適性の差が、オンライン授業ばかりだった時代、逆に対面授業に全面的に復帰した時代それぞれにおいて、正課、課外それぞれにおける学びや意欲に影響を与えている可能性があり、また、ストレスを与える原因の一つになっていることが考えられます。

.....

5. まとめ

2023年度は対面授業が完全に復活し、感染予防のための学生、保護者の「特別配慮」もなくなりました。しかし、昨年度から「一方的な講義ならばビデオ・オン・デマンドにして欲しい」、「学生が対面かオンラインかを選べるようにして欲しい」などの要求が学生からたびたび聞かれ、教員側も「コロナ禍でビデオも作っ

であることだから、教室に来てビデオを観て学習してもどちらでもいいよ」などと答えた途端、教室に現れる学生がほとんどいなくなったという話を耳にすることも少なからずありました。

学生はオンライン授業や遠隔授業を嫌っていたわけではなかったのです。むしろどちらの方式であっても、その効果や成果がより明確に表れるように授業をして欲しかっただけなのです。コロナ禍の辛い長い期間はそのことを学生、教職員にしっかりと教えてくれました。

一方、学生にはオンライン授業や遠隔授業に適性を持つ人、対面授業に適性を持つ人がいて、どちらの方式であってもうまくやれる人とやれない人が出てくることも分かりました。これは授業に関して述べていますが、恐らく生活そのものについても同じことが言えるでしょう。これまでは対面での生活が当たり前だったがゆえに人と会わない経験をしてこなかっただけで、実はどちらの場合でもうまくやれる人とやれない人がいるのではないかと推察します。

コロナ禍で全国の初等中等教育の児童生徒が、休校になったり、課外活動を制限されたり、対面での活動に大きな制約を課されたりして生活をしてきました。これらの児童生徒が、今後、大学に進学してくる際、2020年度の入学生に見られた抑圧や喪失感を引きずっていないかどうか、これからも最大限の注意を払ってしていく必要があります。また、学習でも生活でも、人にはそれぞれ適性があるということを知った上で、価値観を押しつけず、どちらの学生であっても対応できる支援や学習環境を整備することが今後は重要になってくると思います。

どうもコロナ禍の後遺症は、2020年度入学生が卒業する2023年度末で終わりになるのではなく、むしろ新たな多様性を拓く始まりの年だったような気がしてなりません。

*1 読売新聞オンライン「小中高生の自殺、過去最多の500人超…コロナ禍で悩み深刻化か」、2023年3月14日、<https://www.yomiuri.co.jp/national/20230314-OYT1T50155/>、2024/01/18参照。

*2 文部科学省「コロナ禍における児童生徒の自殺等に関する現状について」：2021年。

*3 文部科学省「令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」：2022年。

*4 総務省「コロナ禍における遠隔・オンライン教育の実施状況」：2020年。

*5 スタディプラス「中高生のオンライン授業経験率」：2022年、https://www.trend-lab.studyplus.jp/post/20220816_2024/01/17参照)

*6 高橋恭子「新型コロナウイルス感染症と学生の心のケア」：2020年12月、https://www.jasso.go.jp/gakusei/about/seminar_kikkinkadai/_icsFiles/afieldfile/2021/03/08/2_takaishi_kityoukouen.pdf、2024/1/17参照)

*7 沖裕貴・藤本学・蒲生諒太・河合正徳「大学生版オンライン授業適性・適応尺度の構成とオンライン授業に不適応を起こす学生の特徴」日本教育情報学会誌『教育情報研究』第38巻第3号、2023年。